

園名と日付が入る

(1)は、ケガについてです(未掲載)。

保護者の皆さまにご理解いただきたい大切なこと (2)

お子さんたちのかみつき、ひっかき

全体的に、ていねいでやさしい文体にしてあります。

主題をはっきり、大きくタイトルにします。タイトルを見て、内容がわかる人は、それ以上、読まなくてすむからです。

子どもに自我(「わたし」「ぼく」)が生まれてくると、かみつきやひっかきが始まります。「それ、ぼくの」「ほしいな、それ」「わたし、やだ」…、こういった気持ちがあっても、まだ言葉にはなりません。だから、かみついたり、ひっかいたりします。または、目の前に出てきた誰かの指や顔に、手や口が出ることもあります。

さらに事実。「好意の現れ」と知らない保護者もいますので。

まず、事実を明確に書きます。前置きをすればするほど、言い訳めいて聞こえます

これは成長発達のひとつの特徴です。こどもたち全員がかみつきやひっかきをするわけではありませんが、かみつきやひっかきが終わらないことも絶対にありません。誰かを傷つけようという気持ちも、子どもにはまったくありません。反対に、「〇〇ちゃん、すき!」「あそぼう!」といった、他者に対する興味がかみつきやひっかきのような行動として出ることもあります。

私たち保育者は、子どもたちが幼いながらも言葉で気持ちを表現できるよう働きかけをしています。ほかのお子さんのおもちゃを取ろうとし始めたら「使いたいのかな? 『かして』って言ってごらん」と伝えますし、ほかのお子さんの顔の前に手を出したら「どうしたの?」と声をかけて、そのお子さんの気持ちをくみとる努力をします。けれども、時として私たちの声かけや働きかけが間に合わないこともあります。

「お子さん」と「子ども(たち)」の使い分けについては、掛札の個人サイト(<http://itsumikakefuda.com>)の「その他」→「日本語」→「信頼をつくる」で説明しています。

「努力はする」けれども、必ずしも止められるわけではないという点を明確に。下の段落も同様。

言うまでもありませんが、保育の専門家として私たちは、子どもたちがかんだりひっかいたりすることを放置はしません。できる限り止めて、気持ちを受けとめ、言葉にするよう伝えます。かみつきやひっかきが起きた時には適切に処置して、保護者の方にもお伝えします。

保護者の皆さんにぜひご理解いただきたいのは、かみつきやひっかきは、「加害」や「被害」といった言葉で表現すべきものではない、ということです。かみついた子どもは「悪い子」ではありません。自分が遊んでいるおもちゃをひっぱられて、「やだ!」という気持ちになるのは、もっ

と年長の子どもでも同じです。ただ、乳幼児の場合は「やめて!」「わたしが遊んでるの!」という言葉よりもずっと先に、手や口が出がちなのです。

「自分の子どもは悪い子」「かんだ子が悪い」と、保護者が思ってしまうよう。

ここでは、「あなたの子ども」のことを言っているのですから、「お子さん」です。「子ども」ではなくて。

あなたのお子さんが園や別の所で誰かをかんだ、保護者の方をかんだ、ひっかいたという時には、「どうしてかんだの（ひっかいたの）？ 話して」とやさしく尋ねてください。「悪い子!」と言ってしまったら、お子さんは心の中にある気持ちを表現できなくなってしまいます。まだ言葉でうまく言えないから、かんだり、ひっかいたりするのです。言葉にできなくても怒らないで、「かんだら（ひっかいたら）痛いんだよ」「言えるようにしていこうね」とやさしく伝えてあげてください。お子さんは、なにかを伝えようとしているのですから。

この手紙を出しただけでは、伝わりません。これから日常的に、積極的に、子どもたちの関わりを伝えていきます(本文参照)。この段落は、その宣言です。

私たちの園でも、子どもたちの間のかかわりについて、保護者の皆さんに今まで以上にお伝えしていきます。「今日、〇〇ちゃんに人形をひっぱられた時、『や!』と言ったんですよ。『私のもの』という気持ちが芽生えてきたのですね」「ニコニコしながら、〇〇ちゃんの顔に手を近づけたので『〇〇ちゃんが好きなんだよね』と話しかけたら、とってもニコリして、うんってうなずきましたよ。その後、仲良く遊んでいました」。かみつikyやひっかきは、「特別な行動」でも「悪い行動」でもなく、子ども同士のかかわりや「仲良し」の中に出てくるものだからです。

最後になりますが、生え始めた歯がかゆくてかむ、ということもあります。ご家庭でそういった様子が見られ始めたら、園にもお伝えください。私たちも、同様のことが見られましたらお伝えしていきます。

保護者の皆さまと保育園の二人三脚で、子どもたち一人ひとりの成長、そして、子どもたちがお互いにかかわりあいながら育っていく姿をしっかりと見守っていきましょう。